

巻頭言

目覚しい進化について


 (財)日本植物調節剤研究協会 理事
 三井化学株式会社 農業化学品事業部長

谷 直都

外房のとある知人宅に車で行かなければならない事情があり、8年ぶりに車の運転をすることになった。先方で車を手配してもらうことも考えたが、日頃世話になっている上に、さらに手間を煩わせるのも忍びないので、レンタカーを借りることにした。

運転の方は、AT車だからどうにかなるとして、心配なのはルートである。それも、地図を見た限りでは、複雑怪奇にしか見えない首都高の突破が、私には一番の難題のように思えた。

目的地は、外房のM市である。そこに行くには、京葉道路がベストである。京葉道路に行くためには、葛西JCTを目指せばよいのだが、手がかりとなるはずの道路標識が、私には殆ど用をなさないという問題がある。最初から「M市方面」などという親切な標識は無いだろうから、ポイントとなるJCTを順次目指していくことになるが、それらの地名と位置関係を未だ全く把握できていないものであるから、たとえ懇切丁寧な標識があったところで、結局は役に立たないのである。あの首都高を、標識と地図を頼りに行くことは、さすがに自信が持てなかった。

実のところ、首都高の経験が全く無いわけではない。横浜に居る時は、妻子をつれて、何度も浦安方面に出かけたし、M市から東京に異動する際も、間違いなく首都高を抜けてきた。途中、卒業式の晴着の女子学生に気をとられ、道を間違えてUターンしたところで、妻に引っ叩かれはしたが、それは一般道に下りてからのことである。昔は全く問題がなかったのである。しかし、8年のブランクは如何ともし難いように思えた。

せめて妻が、ナビをやってくれれば良いのだが、彼女は、家事一般を無難にこなす反面、地図を全く読めないという重大な欠陥を有している。でも、とりあえず、車の運転はできるので、私がナビを努めて妻が運転するのがベターということになった。

そんなわけで、久しぶりにロードマップを見ながらあれこれ思案していたら、「そんなの、カーナビの言うとおり運転すれば簡単ですよ」と職場の部下に言われたのである。

私は全く知らなかったのであるが、最近の車

はレンタカーも含めて、ナビ付きが普通となっており、機能も信頼性も抜群ということなのである。半信半疑ではあったが、他に頼る術もないことから、その言に素直に従うこととした。

当日の車は、シルバーのサニーであった。妻は自分が正真正銘のオバサンであることと、つれあいが救いようもないオジンであることを一向に介せず、「車がオジン臭い」といって文句を言ったが、それはさておき、驚嘆せざるを得なかったのは、聞きしに勝るナビの機能である。

まず、行き先(住所表示)を入力して、動き出したとたんに、「ただいま、千川通りです。前方交差点を左折してください」と優しい声が出て、さらには、「3キロ先渋滞です」と言っていて、次なる候補を瞬時に選んでくれるのである。交差点では取るべき車線、JCTではその構造と進むゲートを図示してくれ、まさに、何も考えずに声の命ずるがまま、ハンドルを操作していくだけでよいのである。8年間の技術の進歩は目覚しく、ハンドルが勝手に動き出す日も間近いとさえ思われた。

変化は、離れている方がよく気がつくものである。日頃顔を会わせている家族や職場の同僚の変化には気がつかないのに、数年振りに昔の友人に会うと、その変容ぶりに驚かされることがある。今回の私の驚きはまさにそのようなものであったと思う。

そのような観点に立つと、除草剤の変容ぶりもまた目覚しいものであることを改めて思い知る。

例えば投込剤についていえば、その技術革新において、あるいは市場の伸びにおいても、極めて穏やかで控えめな、むしろ緩慢とさえいえる進化をとげているような、そんな印象をずっと、私は抱いていたのであるが、それはたいへんな不見識であったと反省させられるのである。もし、数年のブランクを経て田んぼに出た人が、「豆粒」の如き少量散布剤を手にした時、その人は必ずや、私がナビに驚嘆した以上の声を発することになるだろう。いや、その前に、選り取り見取りの薬剤の選択肢に圧倒されるに違いない。東京に戻る道すがら、そんなことを考えた次第である。